



ピタインダカン

(おさみがりにぼし)

第 53 号

発行日 2025 年 9 月 1 日

発行人 矢代 しー

秋田市御野塩 7-1-29-305

カラス

今朝もカラスが鳴いている

十羽ほどの黒い集団は

未来からの電線で

声をまき散らしている

聞き澄ますと

可笑しみにあふれて

雑多な声は

切削硝子のラツパ

黒い音しかないのに

どんな音にも聞こえる

ポリフォニー

黒光りする尾っぽは

燕尾服の指揮者

揃って合唱を楽しむかのよう

碧の眼

大きな湖の内側に
水の森があつた

湖は
愛し子を胸に抱く
母親

森には
シャープな針葉樹はない
細身でやわらかく
ハーモニーがとれた
木々が
湖水から
貌をのぞかせているだけ
新緑をわたる

初夏の風が
ターコイズブルーの
皮膚をなでる
と

みどり葉は
ほほ笑んだまま
手をふる

さやかにかがやく
湖面には
逆さ立ちした木々の
濃緑の影が
しつかりと浮かんでいる
丸みのある雲も
遊んでいる

神秘さをたたえた湖の
星のような
碧の眼と

目があつた

碧は

まっすぐに

わたしに語りかける

清澄な声は

ひだまりのような

やさしさ

水の森にも

幾重もの金糸を織りこんだ

陽光が降りそそぐ

大きな湖の底でも

やすらぎの

水の森は

みずみずしく息づいている

舟

アカシアは眠っている

東雲しのめの空が

ゆるりと開かれ

遠くの山が姿を現しても

ふくよかな眠りを

眠っている

風がからかい

ふつと息を吹きかける

と 薄目を開け

追いはらう

風は

格好の遊び相手と

力まかせに

艚ろをこぐ

やっと

アカシアが目覚めた

風は漕手

オールの音がひびく

たおやかな花房は

風に従い

左にゆらり

右にゆらゆら

乳白色の舟は

羽ばたく蝶のように

芳醇な薫りも漂わせる

初夏の明るさのなか

花の舟は

楽しい光の



水彩画

美術館の一角

川面に反射した

淡い朱色に

夏のしじまが流れている

水彩画の夕焼けがある

横長に描かれた絵は

余白が広くとられていて

夏の終わりの

静けさが伝わっている

ひとりの紳士が

水の上の

黒く連なる

樹影を見つめている

身じろぎもせず

立ちつくしている

心の暗闇に

清新の気が吹き込み

むすぼれた心が

開かれていくのだろうか

ひとりの女性は

左岸の小高い丘に見入っている

しきりに

視線を上下に移し

無言のまま

唇を噛んでいる

遠い日の

許しがたい記憶を

思い浮かべたのだろうか

やがて

美術館を後にする

二人の顔には

おだやかさが浮かんでいた

夕焼けの水彩画は

魂に

宇宙的な

生命の光を放ったのだろう

北の旅

朝刊の

「全国温度」に目を通す

私とつながる

秋田・横手・福島に

赤の下線を引く

今年

孫が札幌に赴任

北の大地も炎暑つづき

札幌・福島・横手・秋田と

一日遅れの温度を

追いかける

地図帳をひろげ

海を渡り

北の旅に出る

函館、五稜郭、箱館山、トラピスト修道院

大沼、駒ヶ岳、長万部、洞爺湖、昭和新山

中学の

修学旅行で見た

景色が浮かび上がる

ここから先は

未知の世界

指が急ぐ

室蘭、登別、倶多楽湖、クマ牧場、白老

苫小牧、支笏湖、千歳、恵庭、羊ヶ丘

札幌の

音、光、風、匂い、色は

孫を守ってくれるだろうか

スズラン・ライラックに囲まれ
北の地で

カッコウのように羽ばたけ！

①

娘とランチに出かけた

駐車場で

いきなり若い女性が

(どちらをご利用ですか？

ぶつと吹き出してしまった

そこは

紛れもなく

♥H界限

車が来るたびに

同じ事を質問

なるほど

カップルは奥のHへ

娘とわたしは

笑いのランチを食べていた

(￣▽￣)

②

今日も

クマ出没の記事が

紙面を飾る

読み進めると

クマの温泉に「安心」

の文字！

ナヌ？

温泉につかる

面々の顔は

穏やか

???

目をこらすと

久々の温泉に「安心」

なーんだ

人騒がせな

クマちゃん！

③

突然

A4の用紙が

空を飛ぶ

あつというまに

男性の手を離れ

旅の空

紙は

意志ある鳥のように

群れをなす

おい

どこまで行くの？

ふるさとの森へ帰るの？

【ご案内】

第十七回「ピッタの会 現代詩勉強会」

左記の通り勉強会を開催いたします。内容は、
「鑑賞・直感・創造——詩の教室」です。

進行は矢代レイ。ご参加をお待ちしております。

日時 十月四日（土）

時間 午後一時～三時半 参加費無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は九月二十七日（土）までに、
矢代レイにご連絡ください。

なお、資料準備のため、必ずお申し込み
ください。

☎090・1935・1180

【あとがき】

八月六日、五木寛之氏の講演「人生の四季」を
聞いた。

「前向きに強く生きる」とよく言われるが、弱
く生きてもいい、後ろ向きでもいいと話された。
心の中に沈んでいるなんとも言えない感覚、寂し
さや悲しさ、憂いなどの感情を見つめて生きてい
く。つまりは、あんしゅう「暗愁」を抱えながら生きていく
ことが大事だとのことだった。

現在、九十二歳の五木氏は、〈玄冬〉の真つた
だ中にあると言う。一つの思考を見つめることで
生きていく、その姿勢が大切なのだと受け取った。
印象深い言葉に、〈エネルギーは悲しみから生ま
れてくる〉とも。

暗闇から生まれる光は、ドン底か
ら這い上がる勇気を与えてくれる。
遅くてもいい、正直に生きたい。

